



< H29110018 >

### 注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～8ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
  - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、試験開始後、解答用紙の氏名欄に氏名を正確に丁寧に記入すること。
  - (2) マーク欄には、はっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 8 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。)

手書きの草稿と活字テキストとの差異の歴史的発生という出来事のもつ意味は限りなく重い。両者の織りなす関係性は、どのように転回し、近代の闇を宿してゆくのであろうか。不当に貶められてきた草稿の復権を唱え、文学研究の対象のリストに新たに付け加えようとするだけでは、おそらく十分ではない。肝要な点は、作品本文と草稿という二項対立がいかに「文学」という近代的イデオロギーを支えてきたかを具体的に検証することであろう。

すなわち「作者」という個人的主体による「作品」の「完成」というこの考え方のもとでは、草稿は印刷された作品本文との関係において、その未完成な表現の烙印を押される一方、印刷されたテキストの方は作者の意図を十全に実現した完成品として評価される。つまり両者の優劣は基本的には作者の意図によって判定されることになる。作者が執筆中に死亡した場合にも、最後に書き遺されたものが作者の意図に最も近いという判断が下され、「決定稿」と見做されることが多い。たとえばロンサールはすでに一五七六年の版で「詩人の立ち会いのもとで印刷された」とわざわざ断っているし、他方モンテーニュの『エッセー』の場合は、印刷された一五八八年版の欄外の余白部分に作者が死の直前まで加筆訂正した「ポルドー本」が今日底本として用いられている。

作者の意図なるものによって司られた本文と草稿の二項対立的位階は一見すると **A** にかなっているように見えるのだが、しかしながらあくまでも歴史的なものであり、活字印刷の発明と普及の時期に形成されたものであることを忘れてはならない。仮に草稿が存在せずに、印刷された本文しか存在しないとすれば、かかる位階はもとより、そもそも「作者の意図」を十全に実現した「完結した作品」なる觀念自体が成立したかどうかおおいに疑わしい。つまり優劣関係の発端は、言うまでもなく近代的草稿の誕生にあり、活字印刷機の思いがけぬ産物の発見こそが印刷テキストの位置づけを問題化したのである。そしてこの草稿／本文という二項対立が、自らを裁定する審級として作者（の意図）を事後的に要請するのであって、その逆ではない。言い換えれば手書き草稿があるがゆえに、それとの対比において印刷に付されたテキストが作者の意図により近い完結したものと見做されるようになったのである。したがって作者の意図があらかじめ、かかる二項対立と階層秩序を組織していると考えられるのは、因果を転倒した主張ということになる。草稿と活字テキストとの対比可能性こそが、作者の意図を召喚する契機たりうるのであり、近代的作者の権威が生まれる背後には、本文と本文ならざるものとの緊張関係が伏在していたのである。

また初期の印刷物には、中世の写本に倣って表題や作者を示す表題紙が存在していないし、印刷物は筆写されること<sup>3</sup>によって普及していったという経緯もある。つまり当初は、手書きと印刷物が異類無碍に共存していたのであり、両者の関係はその後次第に相違が意識されるにつれて問題化していったものと思われる。手書きのエクリチュールは、近代以前の写本においては、範囲はともかく一定の読者による享受を想定した公的メッセージであったが、近代に入ると、書齋という私的空間のなかでの作家の創作過程の物質的痕跡へと変貌を遂げる。他方、活字印刷術の普及によって、個人的作者の固有名を表題紙に印刷した自己同一的なテキストが大量に再生産され、十八世紀を通じてイギリスやフランスで著作権が認められるようになる。作者が校正刷りに目を通して校了する習慣が定着するのは、十九世紀初頭のことである。へ作者によって承認された（＝権威ある）唯一不動の本文<sup>4</sup>（＝テクニカル）という近代的な本文<sup>5</sup>概念がここに至ってようやく定着することになる。活字印刷物が普及し始めて三世紀ほどを経て、自らのテキストへ著作権を行使する近代的作者がヨウやく名実ともに生誕したことになる。

こうして活字テキストは、海賊版、手書きの筆写本、草稿、註釈的言説といった自らの周囲に叢生する非・本文との関連で、これらの他者を否定的媒介として、作者のお墨付きの本文、すなわち決定稿という近代的規定を受け取るに至るのである。しかし、近代的草稿の誕生を一つの契機とする本文／非・本文の二項対立は社会的な認知を経ていったん成立すると、自らの出自を隠蔽し、倒錯的な認識をたちまち組織してしまう。すなわち、作品が刊行された瞬間に作者はその所有者として登場するのだが、あたかも作品に先立って自立して存在していたかのような錯認を制度化してしまい、非・本文を視界から駆逐しようとするのである。しかし繰り返すが、本文／非・本文の対比可能性こそが、本文の特権化を促し、作者をその最終的な審級として事後的に召喚するのである。

さて活字テキストと手書きの草稿という二項対立が作者を要請するという局面から草稿に再び眼を転じてみると、一体なが見えてくるであろうか。結論を先取りして言えば、生誕と同時に活字文化の闇に遺棄されてしまった草稿は、劣位を逆手に取る形で、これまでにはなかつた豊饒な可能性を獲得したことが判明してくる。活字文化の繁栄は、閉ざ

された私的空間のなかで筆を手に執って白紙に直面する孤独な書き手を、歴史の蔭の舞台に登場させることになった。写本の制作過程と異なると、この書き手は社会的公共性に伴う諸々の拘束や配慮を免れて、法外な自由を密やかに享受することになる。すなわち、一人で白紙に面した近代的な書き手は、自ら書いたものを読み返しては書き直すという、いわゆる推敲と呼ばれる作業にここではじめて本格的に従事することになったのである。自在な書法に委ねられたとき、言葉はもうひとつの、初々しい表情を見せてくる。中世の写本が朗読され筆写される過程で差異・ヴァリアントを生んでいったとすれば、近代的草稿は、書くことと読むこととの間に介在する時間的隔たりが不可避的にもたらす観点の差異によって、書き手にフダンの書き直しを促し、そこに新たな表情を宿すことになるのである。

作品の描籃とも廢墟ともいえる草稿の異貌は、生成と消滅が溶け合う坩堝のなかに身を置いた作家の運筆のなずみを通して、書くことの本質を現在進行形の煌めきのなかに鮮やかに告知してはいないであろうか。言葉と言葉が衝突と離反と結合を繰り返して、黒い筆跡が次第に生氣を帯び、多層的な運動体と化していく草稿特有の筆勢は、マラルメが書物のなかに透視した暗闇を生々しく開示し、美術品としての価値を持っていた中世の写本や活字の整列する近代のテキストと鮮やかな対照を示す。複数の言葉が、ヤコブソンが「選択の軸」と呼ぶ範列における選択を拒んで、同時的に顕在化しようとするために、連辞という線状性の秩序に収まりきれなくなるという言葉の劇が紙の上で演じられると言えらる。草稿は、立ち騒ぐ無数の言葉が交響し、思いもよらぬ生成の劇が演じられる格好の舞台に変貌を遂げる。草稿は、同じことをめぐってつねに別様に書きうるといふ言語の無限性が、紙の白に刻まれる文字の黒として明滅する場となったのである。筆を手に執った近代初頭の書き手は草稿のこの思いがけぬ機能を眼前にして驚きで目を瞠ったに違いない。事実ルネッサンス期の草稿にはすでに、フローベルやヴァレリーの草稿を彷彿させるような奔放な筆致が認められるものがある。肯定と否定がせめぎ合いつつ共存する草稿空間では、言葉の絶えざる転生によって同一律は易々と超えられ、相反するものの同時共存によって矛盾律は毀棄されて差異と生成の論理が前景化する。矛盾から生じる様々な波紋をいつも抱え込んでいるのが草稿の特徴であろう。マゲマの噴出を思わせるようなものや賢治の「雨ニモマケズ」の草稿のように文字通り一切の虚飾を排したかのようなものもある。さらに肯定でも否定でもないところにこそ草稿のエクリチュールの独自性があるとすれば、それは排中律をもついに超えたありうべからざる場と化してくるだろう。形式論理の地平を超越した理外の理というしかない不可視の力学が草稿には漲っている。

言わば草稿は、光からの隔絶を代償として、闇のなかの祝祭が人知れず繰り返り広げられる倒錯的な場として顕れてくるのである。肝要な点は、光（活字テキスト）によって視界から消去されてきた影（草稿）こそが、逆に光を生むという視座への転換なのである。草稿を狭隘な作者の意図なるものに従属させることで、それが誘発する驚きを処理してしまうのではなく、漆黒の闇の底に素手で降り立ち、そこに息づく言葉の生成の劇が、もうひとつの歴史にほかならないことを触知することが、ここで問われている。筆を執った作家は、この近代的草稿の誕生の劇を、紙の上でその都度一回限りの未完了の出来事として限りなく反復することになる。

（松澤和宏『生成論の探究』より）

## 問一 空欄

A

に入るべき語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 実
- ロ 眼鏡
- ハ 理
- ニ 意
- ホ 規範

問二 傍線部1「優劣関係」と同様の意味で用いられている最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 活字テキスト
- ロ 異類無碍
- ハ 対比可能性
- ニ 階層秩序
- ホ 否定的媒介

問三 傍線部2「活字印刷機の思いがけぬ産物」とは何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 審級としての作者の意図
- ロ 活字の整列する近代のテキスト
- ハ 「完結した作品」なる観念
- ニ 近代的な本文Ⅱテキスト概念
- ホ 活字文化の闇に遺棄された草稿

問四 傍線部3「その逆ではない」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「作者の意図」が断片的に反映されたものが草稿と呼ばれたのに対して、より十全に反映されたものが本文と呼ばれたということ。
- ロ 本文と草稿とが対比されるようになる前には、「作者の意図」が問われることはなかったということ。
- ハ 「作者の意図」を十全に反映した本文があり、そのことで創作過程を映した草稿にも価値が生まれたということ。
- ニ 「作者の意図」が十全に反映された本文によってではなく、草稿によって近代的作者の權威が生まれたということ。
- ホ 自らを裁定する審級としての作者は事後的に要請されたのであって、自ら進んで要請したのではないということ。

問五 傍線部4「ヨウヤク」のカタカナ部分と同じ漢字を用いる熟語はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 工場をザンジ停止する
- ロ 生産がゼンジ増加する
- ハ カンキユウ自在に操る
- ニ オンピンに事を処理する
- ホ ザンシユの刑に処す

問六 傍線部5「非・本文」としてあてはまらないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 写本
- ロ 表題紙
- ハ 註釈的言説
- ニ 決定稿
- ホ 校正刷り

問七 傍線部6「否定的媒介」とはどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 草稿は、印刷された本文より未完成な表現として不当に貶められるということ。
- ロ 決定稿は、決定稿でないものがある故に決定稿になるということ。
- ハ それ以外の派生テキストと共存することにより、決定稿が生まれるということ。
- ニ 作者が最終稿であると見なすことにより、決定稿が決まるということ。
- ホ 読者が最終稿であると見なしたものが、決定稿となるということ。

問八 傍線部7「最終的な審級として事後的に召喚する」とはどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 決定稿が何かわからない場合、最終的にはより「作者の意図」に近いものによって決定するということ。
- ロ どれを決定稿にするか検討していく際、作者が残したメモや日記の文章によって決定するということ。
- ハ 草稿があるが故に決定稿が存在し、その特権化の根拠として作者という概念が要請されるということ。
- ニ 中世の写本では作者という概念は重要ではなかったが、より時代が下ると重要になってくるということ。
- ホ 本文と非本文の優劣関係は作者が決定したものであり、あくまでも一つの解釈に過ぎないということ。

問九 傍線部8「フダン」に用いられる漢字と同じものを含むのはどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 国立大学のフゾク校
- ロ 合唱歌のガクフ
- ハ フシギな文様
- ニ フの遺産
- ホ フツウ選挙

問十 傍線部9「倒錯的な場として顕れてくる」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「完結した作品」なる観念から解放されているが故に、逆に豊饒な可能性を獲得する場として顕れてくるということ。
- ロ 闇より光の方が実際には価値があるが、闇の方がより豊かな解釈の可能性を含む場として顕れてくるということ。
- ハ 完成した作品であるほど失われるものが多く、逆に未完成であるほど得るものが多い場として顕れてくるということ。
- ニ 「作者の意図」を十全に反映した本文ではないことで、逆に多様な解釈を引き出す余地を残した場として顕れてくるということ。
- ホ 常識的には光の方が価値があるとされているが、常識を転倒することを目的とした場として顕れてくるということ。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。)

寛平二年(八九〇)春、菅原道真は讃岐守としての四年の任期を終えて帰京しました。「春日、故右丞相の旧宅に感ず」(菅家文章「巻四」という詩の題の下に、「此れより以下十三首、秩(任期)罷みて京に帰りての作」と自注されています。したがって、この詩が帰京後の第一首ということになるわけですが、この詩じたい、彼の諷諭詩的な作品、すなわち政治社会や世相に対する批判的諷刺がこめられた作品の一つとして注目すべきものです。右大臣の生前には、その恩顧引き立てにあずかるうとして、大勢の人々が押し寄せていたのに、右大臣が亡くなると、もう誰もこの家に寄りつかなくなりました。そうした I に対して、庭の花は今年もまた春を忘れずに咲いている……。この詩前半の叙景はひじょうに印象的で、とくにここに点じられた花は、あの紀貫之の「百人一首」にもとられて名高い歌、

人はいさ心も知らずふるさととは花ぞ昔の香ににほひける(古今和歌集「春歌上」)

この「故右丞相」は、仁和四年(八八八)十月十七日に薨去した源多をさすものと考えられます。多が亡くなった日は、ちょうど道真が、藤原基経を諫める書を呈するために、ひそかに讃岐から上京していた頃に当たります。ですから、この詩の最後の句「未だ葬らざるに争ひ馳せて勢家に到る」は、その折に道真が実際に見聞したことだった可能性もあります。

それはともかく、道真は、権勢ある者の横暴を憎んでいただけでなく、権勢家に阿諛追従し付和雷同する世人たちをも嫌悪していたことがうかがわれます。恩顧を求めておきながら、一旦その者が失脚したり死亡したりすると、もう弊履のごとくこれを捨てて顧みなくなる世人のあざとさ、薄情さ。それゆえに、この世間で人と交際する道の困難さ、陰難さ。それを漢文学では「交道難」と言います。右の「春日、故右丞相の旧宅に感ず」詩も、まさにこの交道難を歌った詩と言えますが、それにしても、帰京後の第一作がこのような内容の詩であるということは、これから道真の登りつめてゆく栄達の道が、同時に険難な荆棘の道でもあることを、予告しているようにも思われます。

ところで「源氏物語」にも、この交道難の主題が明らかに認められる所があります。「源氏物語」の賢木の巻で、光源氏(大將殿)の父桐壺院が崩御すると、政権は時の右大臣と弘徽殿の女御方に移り、光源氏は政治的に逆境に追い詰められます。その賢木の巻に次のような一節があります。

年かへりぬれど、世の中いまめかしきことなく静かなり。まして大將殿は、ものうくて籠りゐたまへり。除目のころなど、院の御時をばさらにも言はず、年ごろ劣るけぢめなくて、御門のわたり所なく立ちこみたりし馬、車うすらぎて、宿直物の袋をさを見えず。親しき家司どもばかり、ことに急ぐことなげにてあるを見たまふにも、今よりはかくこそは、と思ひやられて、ものすさまじくなむ。

除目とは春と秋の二回、朝廷で行われた II のことですが、その除目の頃ともなれば、桐壺帝在位時代はもとより讓位後もいささかの変わり目もなく、光源氏邸の門前には、その引き立てにあずかるうとする者たちの馬、車が立て込んだものだったが、院の崩御後はうってかわって閑散としている、というのです。右大臣・弘徽殿方からの迫害はいよいよつり、このままでは完全に政治生命を絶たれてしまいかねないと判断した光源氏は、意を決して須磨に退居します。が、二年後に光源氏は京に呼び戻されて、いよいよ光源氏の執政時代になりますと、世人たちは再び彼のもとに殺到したのでした。

さるほどに、げに世の中にゆるされたまひて都に帰りたまふ、と天の下よるこびにて立ち騒ぐ。我も III 人より先に、深き心ざしを御覧せられん、とのみ思ひ競ふ男女につけて、高きをも下れるをも、人の心ばへを見たまふに、あはれに思し知ることさまさまなり。

このように蓬生という巻には書かれています。我も我もと競うように、何とかして人より先に光源氏に自分の忠勤の志を認めてもらおうとばかり考えているような世人たちの振る舞いを見るにつけて、身分の高い者についても低い者についても、人の心のありようについて、しみじみと思ひ知らされるのが種々あった、というのです。じつさい賢木の巻からこの蓬生と次の閑屋の巻にかけて、物語には、軽薄に「IV」「心といささかも」「V」「心を両極として、その中間にあるさまさまな心のありようが、さりげなくしかし丹念に描き分けられていたのです。

(藤原克己「菅原道真 詩人の運命」より)

問十一

空欄

I

II

に入る語句として、最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- I イ 右大臣の旧宅の静寂    □ 栄達への道の険しさ    ハ 亡き右大臣を悼む心  
ニ 人の世の変わり易さ    ホ 賈き物を抱えた来客
- II イ 管絃の遊び    □ 御霊会    ハ 人事銓衡    ニ 登用試験    ホ 花の宴

問十二 傍線部1のように、紀貫之の「人はいさ……」の歌が「想起させ」られるのはなぜか。その理由の説明として、

最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 貫之の歌でとらえられている春の花の香は、道真の詩における春の叙景からおのずと連想されるものだから。  
□ 貫之の歌で詠まれている花は、道真の詩における花と同様、ずっと変わらないものを象徴しているから。  
ハ 貫之の歌における花にも、道真の詩と同様、政治社会に対する批判的な諷意が込められているから。  
ニ 貫之の歌にみられる花への賛美は、道真の詩と同じく、亡くなった人への哀悼の意を込めたものだから。  
ホ 貫之の歌に詠まれた花の種類は、道真の詩においてとらえられている庭の花と同じだと想像されるから。

問十三

傍線部2の「予告」が関わるのは、菅原道真のどのような将来か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解

答欄にマークせよ。

- イ 権勢家に対して恩顧を求め続けながら、結局は栄達を極められない将来  
□ 実力者を厳しく諫めたことで、栄達を遂げながらも周囲から嫌悪される将来  
ハ 少なからぬ苦勞の末に栄達を果したが、やがて政争に巻き込まれ失脚する将来  
ニ 大臣たちの横暴を憎むあまり、栄達の道から離脱して隠遁することになる将来

問十四

傍線部3の内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人の世にあっては、いまましいこともない。  
□ 社会の中では、特段の流行もみられない。  
ハ 世間においては、はなやかなこともない。  
ニ 夫婦の間では、目新しいこともない。

問十五

傍線部4の内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 今から後は、このように顧みられない状況がきつと続くのだろう。  
□ 今に至るまで、このように顧みられない状況を経験したことはない。  
ハ 今までに比べると現在は、このように顧みられない状況になったのだ。  
ニ 今より昔の方が、このように顧みられない状況がひどかったのではないか。

問十六

傍線部5と同じ意味を表すものを二重傍線部a、eの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

問十七

空欄

III

に入る語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ いかがは    □ いかなれば    ハ いかで    ニ 何かは    ホ 何とて    ヘ 何ゆゑ

問十八 空欄 **V** と **V** に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ IV Ⅱ あはれと思ふ
- Ⅴ Ⅱ 情けにおぼれぬ
- ロ IV Ⅱ 時に従ふ
- Ⅴ Ⅱ 世になびかぬ
- ハ IV Ⅱ 人と競ふ
- Ⅴ Ⅱ 深き心ざしを見せぬ
- ニ IV Ⅱ 人の心ばへを見る
- Ⅴ Ⅱ 世人をゆるさぬ

問十九 菅原道真の活躍した時代よりも前に成立した作品を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「大鏡」
- ロ 「懐風藻」
- ハ 「玉勝間」
- ニ 「方丈記」
- ホ 「大和物語」
- ヘ 「和漢朗詠集」

問二十 次の漢詩は、本文の最初に紹介されている「春日、故右丞相の旧宅に感ず」である。これを読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、訓点を省いた箇所がある。)

緑柳依依白日斜  
 人蹤銷滅滿庭沙  
 只今暮宿簷間鳥  
 仍旧春開砌下A  
 不得平生排閤謁スルコトヲ  
6 無下 勝感悼望門嗟スルコト  
7 駕肩來客知何在  
 未葬爭馳到勢家

(一) 空欄 **A** に入れるのに最も適切な漢字一字を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 白
- ロ 紅
- ハ 燃
- ニ 暗
- ホ 花

(二) 傍線部 6 「無勝感悼望門嗟」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人生の勝利者としての地位に甘んずることなく、世の中への展望を忘れまい。
- ロ 感情が高ぶったために門から外の世界を望まずにはいられまい。
- ハ ここに来た折の感動に勝ることはないかと門外をながめている。
- ニ この門前における我が嘆きと死者胸中のつらさを比べるといずれが勝るのか。
- ホ 死者をいたむ気持ちを抑えても門前に立てば嘆かずにはいられない。

(三) 傍線部 7 「知何在」という句とはほぼ同じ意味で使用されている本詩の中の語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 依依
- ロ 銷滅
- ハ 只今
- ニ 仍旧
- ホ 感悼

〔以下 余白〕